

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 16 日現在

機関番号：22604
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2012
 課題番号：20520618
 研究課題名（和文） 『三国遺事』の総合的研究

研究課題名（英文） A study on Samguk-yusa

研究代表者 木村 誠
 (KIMURA MAKOTO)
 首都大学東京 人文科学研究科 教授
 研究者番号：40094263

研究成果の概要（和文）：本研究は、朝鮮古代史研究における基本文献の一つである『三国遺事』について、①現存する諸板本に対する書誌学的調査、②『三国遺事』本文の校訂・校勘作業と訳注校本の作成、③各記事の内容分析を実施することを課題とした。①では国内外の諸板本を調査して、板本比較のための基礎データを収集した。②では訳注本出版に向けて原稿を作成中である。③については関連文献の収集など、基礎作業を実施した。

研究成果の概要（英文）：I performed the following study about Samguk-yusa which was one of the basic documents of the Korean ancient history. At first I investigated a printed book of Samguk-yusa, and collected basic data to compare the printed books of Samguk-yusa. Secondly I revised the texts of Samguk-yusa and prepared a manuscript to be published as an editorial volume. Thirdly I collected the research materials that studied Samguk-yusa and analyzed the contents of each article of Samguk-yusa.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：『三国遺事』、中宗壬申刊本、古刊本、

1. 研究開始当初の背景

『三国遺事』(5巻・9篇)は、高麗の僧・一然が13世紀末に編纂した史書であり、金富軾撰『三国史記』(50巻、1145年)とならぶ朝鮮古代史研究の基本文献として著名である。本書には古朝鮮(檀君朝鮮)以来の朝鮮の歴史とさまざまな仏教説話が採録されており、さ

らに寺記・僧伝、古記・郷伝、金石文・古文書等が多数引用されるなど、『三国史記』にはない独自の史料価値が認められる。

『三国遺事』は、編纂後それほど間をおかず印刷に付されたものと思われる。すなわち14世紀にはすでに刊行されていたと推定されるのだが、その板本はいまだ確認されてい

ない。したがって現存する『三国遺事』板本は、すべて朝鮮王朝時代のものである。

そうした諸板本の中でも最善本とされてきたのが、朝鮮王朝中宗7年(1512年)刊行の天理大学本(今西本、天理大学附属天理図書館所蔵)である。この天理大学本は欠張のない完本であり、1926年に京都帝国大学文学部により影印本が刊行されて以来広く流布し、朝鮮古代史研究に活用されてきた。また、天理大学本と同様の中宗7年刊本としては、蓬左文庫本(名古屋市蓬左文庫所蔵)、晩松文庫本(韓国・高麗大学校大学院図書館所蔵)、ソウル大学本(韓国・ソウル大学校中央図書館所蔵)等が知られており、このうち晩松文庫本とソウル大学本は韓国において影印刊行され、校訂等に適宜利用されてきた。

以上は中宗7年刊本であるが、それに先立つ刊本(以下、古刊本)としては、石南本(王暦・巻1、宋錫夏旧蔵、所在不明)と鶴山本(巻3・4・5、郭永大所蔵)がつとに世に知られており、特に王暦の部分において天理大学本との違いが著しいことが指摘されている。そして近年の韓国ではこうした古刊本に対する関心が高まり、泥山本(巻2、韓国・誠庵古書博物館所蔵)、趙鍾業本(巻2、趙鍾業旧蔵、所在不明)、梵魚寺本(巻4・5、韓国・梵魚寺所蔵)、孫宝基本(王暦・巻1・2、孫宝基旧蔵、韓国・延世大学校図書館所蔵)等の古刊本が確認されるに至った。

これら古刊本は朝鮮王朝初期の刊行と推測されているが、いずれも残巻であって完本ではない。また欠落する部分も少なくない。そのため『三国遺事』研究においては、現在でも天理大学本に代表される中宗7年刊本が底本として利用されているのが実情である。しかし中宗7年刊本以前の古刊本が存在する以上、その検討を抜きにしては『三国遺事』の史料の活用は望めない。中宗7年刊本とともに古刊本を視野に入れた『三国遺事』研究が求められているのである。幸い古刊本のうち梵魚寺本と趙鍾業本が2000年代に入って影印刊行され、一般の利用が可能となった。

こうした状況のなかで、1980年代以来国内外において『三国遺事』の書誌学的研究とそれを踏まえた校訂・校勘、訳注作業が進展し、大きな成果をあげてきた。またそうした基礎的研究とともに、『三国遺事』本文の内容についても様々な角度から分析が進められ、『三国遺事』を歴史資料として活用する方策が模索されていた。

本研究の背景にはこうした研究状況が存在したのであり、『三国遺事』板本の書誌学的調査・研究、本文記事の校訂・校勘作業、そして記事内容の批判的検討を総合して、『三国遺事』の歴史的性格を究明することを課題とする本研究を計画した。

2. 研究の目的

本研究は『三国遺事』を総合的に調査・研究し、『三国遺事』を歴史資料として活用するための方法論を確立することを目的とするものであるが、その課題は大きく分けて三つある。

第一に、『三国遺事』板本の書誌学的調査である。既存の影印本を活用すると同時に、直接原本にあたって調査することに重点を置き、『三国遺事』板本の現状を具体的に把握することを目指した。

すなわち日本と韓国に現存する古刊本と中宗7年刊本を可能な限り実地調査し、古刊本と中宗7年刊本が持つ諸特徴を具体的かつ総合的に把握する。そのうえで諸板本の先後関係を考察し、最古の板本を確定するための手掛かりを得ることを目的とした。

第二に板本調査を踏まえ、『三国遺事』を東アジア古代史研究に広く活用しうるテキストとして確立することを目的として、『三国遺事』本文の校訂・校勘作業を行う。そして原文、書き下し文、日本語訳、注からなる訳注校本を作成し、『三国遺事訳注』として刊行することを目指した。

訳注校本の作成は、本研究開始前から取り組んできた課題であるが、今回、新たに実施する諸板本の書誌学的調査の結果を積極的に取り入れることに心がけた。とりわけ古刊本から得られる書誌情報は、既存の訳注本には十分に反映されておらず、従来にない訳注校本の作成を目的とした。

また、『三国遺事』の各記事は本文記事と註からなり、加えて贊が記される場合もある。さらに『三国史記』、中国正史、寺記・僧伝、古記・郷伝、金石文・古文書からの引用も多い。しかも不正確な引用が多く、来歴不明の原典も少なくない。『三国遺事』の構成は複雑であり、各記事の史料的性格は同一ではない。作業ではこうした点に留意し、引用文と原典記事の比較検討、寺記・郷伝・金石文・古文書等の性格把握を通じて各記事の腑わけを行い、史料的価値を逐一吟味することを目指した。

そして第三に、以上の板本調査と校訂・校勘作業を踏まえて、『三国遺事』各記事の史料的性格の分析を行うことを目指した。その際留意したのは、各記事の個別的検討ではなく、『三国遺事』を歴史資料として活用するための方法論を確立するという点である。その基本的視点は、『三国遺事』を高麗時代の歴史的編纂物として改めて位置づけなおし、その性格を再吟味することである。とりわけ説話的性格の濃い記事については、説話としての成立過程に着目し、説話成立の歴史的背景とそこに見てとれる歴史認識を検討することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 『三国遺事』板本の調査

日本と韓国の研究機関等に所蔵されている『三国遺事』板本を実地に調査し、書誌情報を採取する。具体的には

- ① 一張ごとに匡郭採寸(縦・横)、版心観察(魚尾、黒口、書名、巻数、張数等)を行う。
- ② 採取した書誌情報について諸板本間の異同を確認し、諸板本の先後関係を考察する。
- ③ その他、版式や摺刷について全体の状態を観察・確認する。

(2) 校訂・校勘、訳注校本作成

既存の訳注本を参照しつつ、校訂・校勘を実施し、訳注本の原稿を作成する。留意した点は以下のとおりである。

- ① 板本調査で得られた成果を可能な限り反映させる。特に古刊本と中宗7年刊本との異同に留意し、テキストの確定を図る。
- ② 特に引用記事に着目する。引用文と原典記事との異同を明らかにし、『三国遺事』各記事の史料的性格を明らかにすることに努める。

なお、参照した主な文献は以下のとおりである。

- ・三品彰英遺撰(村上四男撰)『三国遺事考証』全6巻(塙書房、1975~1995年)
- ・キム・サヨプ訳『完訳 三国遺事』(朝日新聞社、1976年)
- ・野村耀昌訳「三国遺事」(『国訳一切経』和漢撰述部・史伝部10、大東出版社、1980年)
- ・李丙燾『国訳 三国遺事』?
- ・韓国精神文化研究院『訳註 三国遺事』全5巻(以会文化社、ソウル、2002~2003年)
- ・河廷龍・李根直『三国遺事校勘研究』(新書苑、ソウル、1997年)
- ・河廷龍『三国遺事史料批判』(民族社、ソウル、2005年)

(3) 各記事の分析・検討

紀異篇(巻1~2)の説話の記事を中心に、朝鮮古代における説話成立の歴史的背景を考察する。具体的には「善徳王知幾三事」条と「駕洛国記」条をとりあげる。特に後者は伽耶史の基本史料であるが、建国説話をはじめとする各種説話を中心に構成されているため、史実の抽出は容易でない。本研究では説話ごとの成立過程を推定することで、「善徳王知幾三事」条と「駕洛国記」条全体の史料的性格を明らかにすることを目指す。作業では(2)の校訂・校勘と連動して関連史料・文献を収集する。また、国内外の朝鮮古代史研究者との討論を通じて分析視角の確立をはかる。

4. 研究成果

研究成果は次のとおりである。

(1) 『三国遺事』板本の調査

① 以下のとおり板本調査を実施した。

a. 天理大学附属天理図書館
2008年度と2012年度に天理大学本(今西本、中宗7年刊本)の原本を調査し、書誌情報を採取した。

b. 名古屋市蓬左文庫
2008年度と2009年度に蓬左文庫本(中宗7年刊本)の原本を調査し、書誌情報を採取した。

c. 韓国・高麗大学校大学院図書館
2008年度、2009年度、2011年度、2012年度に晩松文庫本(中宗7年刊本)と六堂文庫本(中宗7年刊本)の原本および複写本を調査し、書誌情報を採取した。また古刊本である石南本と鶴山本の筆写本を閲覧し、頭注の内容を確認・整理した。

d. 韓国・ソウル大学校奎章閣
2009年度、2010年度、2011年度、2012年度にソウル大本(中宗7年刊本)の原本および複写本を調査し、書誌情報を採取した。

e. 韓国・梵魚寺
2008年度、2010年度に梵魚寺本(古刊本)の複製本を調査し、書誌情報を採取した。

f. 韓国・東国大学校
2008年度~2012年度に金相鉉教授と『三国遺事』板本調査について意見交換を行った。また関連資料の提供を受けるとともに、泥山本(古刊本、誠庵古書博物館所蔵)、趙鍾業本(古刊本、趙鍾業旧蔵、所在不明)の複写本から書誌情報を採取した。

g. 韓国・国立中央図書館
2012年度に、『三国遺事』王暦の写真22枚を閲覧・調査した。この写真は「武者鎌三氏蔵本」を朝鮮古蹟研究会が1939年に撮影したものであり、中宗7年刊本の王暦である。しかし従来の諸板本とは異なるものであり、所在等について今後の調査が期待される。また、天理大学本の影印本である京都帝国大学本と古典刊行会本を閲覧・調査した。その結果、京都帝国大学本は原本を忠実に影印しているが、古典刊行会本には原本の一部を改変した個所があることを確認した。今後の利用に際しては注意が必要である。さらに、古典刊行会本には李秉直本(古刊本)との対校結果が頭注として朱書されていることを確認した。石南本と鶴山本の筆写本に中宗7年刊本との対校結果が頭注に記されていることは周知の事実であるが、それとの関連が想起されるところである。

②調査の結果得られた成果は以下のとおりである。

a. 基礎データの収集・整理

現在調査可能な『三国遺事』板本を逐一調査し、匡郭寸法と版心（魚尾、黒口、書名、巻数、張数）の状態を各板本に共通する基礎データとして収集・整理した。調査した板本を改めて表示すれば、次のとおりである。

【古刊本】

泥山本(複写本)、趙鍾業本(複写本)、梵魚寺本(複製本)

【中宗7年刊本】

天理大学本(原本)、蓬左文庫本(原本)、晩松文庫本(原本、複写本)、ソウル大学本(原本、複製本)、六堂文庫本(原本、複写本)

b. 諸板本印刷の先後関係

すでに指摘されていることであるが、中宗7年刊本は、古刊本の板木を一部再利用して印刷されている。古刊本のうち利用不可能な板木だけを復刻したのであり、その際の匡郭の寸法は古刊本より1cm前後小さくなっている。古刊本と中宗7年刊本の匡郭高(縦)を比べると、両者の間に1cm前後の相違が見られるものと、両者ほぼ近似した数値を示すものが混在しているのはそのためである。古刊本の方が1cmほど匡郭高が大きいのであり、両者を区別する指標の一つとして重視されてきた。

ところで、同じ古刊本でも匡郭高にわずかな相違が見られ場合があり、注目される。幸いなことに泥山本と趙鍾業本はともに巻2だけの残巻であるため比較が可能であり、両者の匡郭高を見ると数ミリの差が生じている。総じて趙鍾業本の方が大きい傾向を示している。この相違は恐らく板木の収縮の結果生じたものであろう。板木は印刷を繰り返すことにより次第に収縮することが指摘されているからである。したがってこの匡郭高の差は印刷時期の差を示すものと考えてよい。調査によって得られたデータから見る限り、趙鍾業本は泥山本より早く印刷されたと言えるのである。

こうした事実は中宗7年刊本においても指摘できる。今回調査した5種の板本の匡郭高は、ほぼ同一の数値を示すものもあるが、全体的には数ミリ程度の差が検出される。ただし大小の差は一定しておらず、同一板本でも最大の場合もあれば最小の数値を示す場合もある。おおむねソウル大学本は大きく、蓬左文庫本は小さい傾向を示すが、例外も多い。中宗7年刊本の場合、一張ごとに精査しながら板本の成り立ちを考察する必要がある

と言えよう。復刻板の可能性を含めて今後の検討課題である。

c. 今後の展望

2013年1月、故孫宝基氏所蔵『三国遺事』(古刊本)が韓国・延世大学校に寄贈され、その存在が世に知られることになった(延世大学本)。それは王暦・巻1・巻2からなる残巻であるが、新たな古刊本の出現として、学会の注目を浴びた。これによって所在が確認できない古刊本の原本は巻3だけとなり、『三国遺事』研究とりわけ板本研究の条件が飛躍的に向上したと言える。現在のところ一般公開には至っていないが、今後、この延世大学本の調査を含めて、書誌情報の収集をさらに進めるとともに、データの分析を精密に行うことで、『三国遺事』板本の全体像を明らかにしていきたい。

(2)校訂・校勘、訳注校本の作成

これまでに巻1・2(紀異篇)の校訂・校勘作業を終了し、訳注本出版のための原稿を作成した。現在は王暦の校訂・校勘作業中であり、この部分の訳注原稿が完成した時点で、『訳注 三国遺事』(汲古書院刊)の出版を開始する予定である。

ただし、上述のように延世大学本(王暦・巻1・巻2)の出現によって、これまで作成した原稿の点検・再検討が必要となった。作業を中断し、延世大学本の公開を待っているところである。

(3)各記事の分析・検討

本研究の課題中最も取り組みが遅れた分野であるが、以下の調査を実施した。

①関連史料の収集等

巻2・紀異篇「駕洛国記」条を中心に、説話記事の成立過程とその歴史的背景を考察することを目指し、関連史料・文献の収集を実施した。特に、韓国における文学や民俗学関連の文献収集に力を入れた。主な調査は以下のとおりである。

・2009年度に韓国・韓国学中央研究院にて史料・文献収集を実施した。あわせて同研究院辛鍾遠教授と説話記事分析(特に「善徳王知幾三事」条)について意見交換を行った。

・2010年度に韓国・韓国学中央研究院にて史料・文献収集を行った。また韓国・東国大学校においても史料・文献収集を実施すると同時に、金相鉉教授と意見交換を行った。

・2011年度に韓国・東国大学校において史料・文献収集を行った。

②史料分析

現在、訳注校本作成作業と並行して「駕洛国記」条の分析を進めているところであり、なるべく早期に成果を発表できるよう作業を急ぎたい。

研究者番号：

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計1件)

木村 誠 『三国遺事』の板本研究について」、韓国文化財庁・財団法人国立劇団共催国際学術シンポジウム「三国遺事、そして神話的想像力と芸術」、2012年8月31日～9月1日、韓国・ソウル・故宫博物館

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 誠 (KIMURA MAKOTO)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：40094263

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()